ラフカディオ・ハーン作

“Chin-chin Kobakama ―― The Fairies of the Floor-Boards” と新作狂言「ちんちん小袴」

牧野陽子

一、縮緬本シリーズ
二、ハーンの “Chin-chin Kobakama ―― The Fairies of the Floor-Boards”
三、原話
四、ハーン「ひまわり」
五、新作狂言「ちんちん小袴」

ラフカディオ・ハーンの再話作品のなかには、「雪女」や「むじな」など、半分創作でありながら、あたかも元からそのような民話や伝説が日本にあったかのように定着したものがある。一方、ハーンに触発され、その作品を素材にした二次創作も当然ながらさまざま生み出されてきた。小説のみならず演劇、オペラや歌曲、ピアノ

曲にハーンの作品が素材として使われている。いわば、ハーンの再話がさらに再話の対象となっていくわけで、時に予想外の変貌を見せることもある。

たとえば、縮緬和紙の絵本として東京で出版された「ちんちん小袴 ― 畳の精の話」（“Chin-chin Kobakama —— The Fairies of the Floor-Boards” 長谷川弘文社刊、明治三十六年（一九〇三））（図1）は、最近、狂言となって上演された。茂山千五郎家による新作狂言、「千作千五郎の会　第三回公演　イェイツと八雲に愛された狂言」（二〇一七年、二〇一八年再演）でのことである。ハーンの作品が想像力を刺激しつつ伝播していくひとつの例といえる。原話である日本の古い伝承が、ハーンにどのように再話され、さらにその再話が、どのような狂言作品へと姿を変えたのか、その連鎖をみていこう。

1、

「ちんちん小袴」表紙　（筆者所蔵）

一、縮緬本シリーズ

「ちんちん小袴」は、子供向けの易しい英文でつづられた日本の昔話で、怠けものの姫が嫁ぎ先で、使った爪楊枝を始末するのも面倒がって畳の間に押し込んでいたところ、夫の留守中、深夜に歌い踊る侍姿の小人たちに悩まされるようになった。帰ってきた夫がその小人たちを退治すると、実は爪楊枝の化身だったことから妻の無精がばれて、夫に叱られるという話である。

この小品は、日本で絵本として出版されたためか、アメリカで出た最初のハーン全集（一九二二）全十六巻[1]には入っていない。だが落合貞三郎・大谷正信・田部隆次訳『小泉八雲全集』（全十七巻、第一書房、一九二六年）には邦訳が収められ、その後、現在では一般の日本民話集や、テレビの「マンガ日本昔話」などにも取り上げられて、ある程度、粗筋は知られているといっていいだろう。

一方、美しく希少な縮緬本としても珍重されてきた。縮緬本とは、明治から昭和初期にかけて、縮緬状に加工された和紙に、木版で手刷りして、絹糸で綴じた、外国語の小型の絵本のことである[2]。長谷川弘文社の長谷川武次郎が中心となり、英文の『日本昔噺シリーズ』(Japanese Fairy Tale Series) 全二十巻（明治十八年（一八八五）から明治二十五年）を皮切りに、日本の生活情景を歳時記風に描いたものや、日本の景色を配した小さなカレンダー、日本の詩歌、童歌集などを次々と刊行した[3]。これらの本は、柔らかい縮緬和紙の質感に加え、小林永濯、鈴木華邨、新井芳宗、川端玉章などの日本画家が担当した多色刷りの挿絵の魅力によって、土産物として、あるいは小

さな美術品として外国人に多く買い求められた。そして何度も版を重ね、木版だから、版木が擦れると、彫り直して、少し色や絵が変わってくる。その違いの面白さもまた魅力なのだろう、今では貴重書として多くの図書館に収蔵されている。

『日本昔噺シリーズ』では、「桃太郎」「舌切り雀」「猿蟹合戦」「花咲爺」「かちかち山」「瘤取」「浦島」といった日本の古い伝説やお伽噺など[4]を、米国人宣教師のジェームズ・ヘボン、デビッド・トンプソン、英国人日本研究者のバジル・ホール・チェンバレン、英国海軍軍人トーマス・ジェイムズの夫人など、当時横浜の日本アジア協会に集っていた文化人グループが英語に翻訳した。このほぼ十年後に、巖谷小波が博文館からほぼ同じラインアップで『日本昔噺』（一八九四～一八九六年）、『日本お伽噺』（一八九六～一八九八年）を出しているため、長谷川のプロジェクトが巖谷小波の仕事を触発したともいえる。

ハーンの「ちんちん小袴」は、この昔話シリーズの続編の一冊として刊行された。チェンバレンの紹介で、長谷川武次郎がハーンに依頼したのだろう。ハーンの手になる同様の縮緬本は、他にも、「猫を描いた少年」（“The Boy Who Drew Cats”, 1898）、「化け蜘蛛」（“The Goblin Spider”, 1899）、「団子をなくしたおばあさん」（“The Old Woman Who Lost Her Dumpling”, 1902）、「若返りの泉」（“The Fountain of Youth”, 1922）がある。化け蜘蛛や、絵に描いた猫が大ネズミを退治するとか、団子を追って異界に行くなど、いかにもハーンが好みそうな話である。そして後に、ハーンのものだけ五冊まとめられて、帙に入れて売りだされた。造りも昔話シリーズの他のものより少し大判であり、表紙に大きく‘rendered into English by Lafcadio Hearn’と記された。他の昔話の場合、表紙に訳者の名を揚げてないから、ハーンの再話作品集であることを強調して世に出された特別仕様だったということになる。

二、ハーンの “Chin-chin Kobakama —— The Fairies of the Floor-Boards”

『昔話シリーズ』所収のほとんどの昔話は、ハーンの他の四編も含めて、“long, long ago”、“a long, long time ago” という決まり文句で始まる。直接、物語だけを語るのである。ところが、「ちんちん小袴」では、物語本文に入る前に、ハーンはまず、こう切り出す。

> The floor of a Japanese room is covered with beautiful thick soft mat of woven reeds. They fit very closely together, so that you can just slip a knife-blade between them, They are changed once every year, and are kept very clean, The Japanese never wear shoes in the house, and do not use chairs or furniture such as English people use. They sit, sleep, eat, and sometimes even write upon the floor. So the mats must be kept very clean indeed, and Japanese children are taught, just as soon as they can speak, never to spoil or dirty the mats.

日本の家の床には畳という柔らかな厚手のマットが敷き詰められている。畳はぴたりと組み合わされて、すき間には刀の刃がやっと入るだけである。畳は毎年新しく取り替えられ、日本人は畳の上で寝起きするので、常にとても清潔にしてある。子供たちも畳を決して汚してはならないと教えられる。と、このように、ハーンは、まず物語の背景となる異国の生活文化の説明から始める。読者である英米の子供たちは日本を知らない。ハーンら

しい民俗学者的関心による記述とみることもできようが、この前置きの目的は、〝畳の部屋〟という物語の舞台空間を、映像として読者の脳裏に描き出すことにある。そしてここで印象に残るのが、冒頭二番目の文に出てくる“knife-blade”だろう。いぐさを編んだ厚手の畳の床は柔らかく温かみがある。だがぴたりと合った縁と縁の隙間に鋭利な冷たいナイフがすっと入る。薄紙一枚ほどの隙間、というのではない。ナイフである。そして一見さりげないこのナイフの映像が、読者の脳裏にかすかに違和感を伴って残る。ハーンは次のように続ける。

Now Japanese children are really very good. All travelers, who have written pleasant books about Japan, declare that Japanese children are much more obedient than English children and much less mischievous.

日本のこどもたちは、日本にきた外国人が感心するほど、みなとても良い子たちである。だけど、とハーンはいう。“there are a few, a very few naughty ones.” なかには悪戯っ子もいる。だから “there are fairies who take care of the mats. These fairies tease and frighten children who dirty or spoil the mats.” 畳には妖精がいて、畳を汚す子どもを懲らしめるのである。そんな妖精たちの小さな話をしてあげよう、と、物語に入っていく。

“Once there was a little girl who was very pretty, but also very lazy.” とても可愛いけれど怠け者の女の子がいた。裕福な家だったので、女中さんたちが全部世話をしてくれたのである。女の子は美しい娘になり、勇敢な侍のもとに嫁いだ。召使は少ないのに、相変わらず物臭で、夫は軍務で留守が多かった。すると或る晩、部屋の中で奇妙

な物音が微かにして目が覚めた。そして彼女は見た。

Hundreds of little men, dressed just like Japanese warriors, but only about one inch high, were dancing all around her pillow. They wore the same kind of dress her husband wore on holidays, — (Kamishimo, a long robe with square shoulders), — and their hair was tied up in knots, and each wore two tiny swords. They all looked at her as they danced, and laughed, and they all sang the same song, over and over again,—

"Chin-chin Kobakama,　　Yomo fuké soro, —

Oshizumare, Hime-gimi! —　　Ya ton ton!" —

Which meant: — "We are the Chin-chin Kobakama; — the hour is late; Sleep, honorable noble darling!"

行灯の明りに照らされて、わずか一寸あまりの、何百人という小人が、枕元で踊っているのである。みな裃を着て髷を結い、刀を差していた。そして彼女の方を見て嘲るように笑いながら、「ちんちん小袴、夜も更け候。お静まれ姫君、やあとんとん。」と繰り返し歌いながら踊った。

それから毎晩、the "Hour of the Ox"; つまり丑の刻になると小人たちは現れ、同じようにして彼女をからかい、悩ませ、朝になるとふっと消えた。妻は病気になった。戻った夫が話を聞いて夜中に見張ると、はたして丑の刻に畳から小人たちが現れ、"Chin-chin Kobakama, Yomo fuké soro……" と歌い踊りだす。"They looked so queer, and danced in such a funny way, that the warrior could scarcely keep from laughing." その奇妙な出で立ちと滑稽な仕草に夫

は笑いだしそうになるが、“remembering that nearly all Japanese ghosts and goblins are afraid of a sword, he drew his blade, and rushed out of the closet, and struck at the little dancers.” 日本の妖怪は刀を恐れるものだということを思いだして、刀を抜き、小人に斬りかかる。すると、

“Immediately they all turned into-what do you think? Toothpicks!

There were no more little warriors — only a lot of old toothpicks scattered over the mats.

たちまちにして小人たちは消え、爪楊枝が畳の上に散らばっていた。妻が使った爪楊枝を捨てず、畳の縁に差し込んでいたのである。夫は妻を叱り、爪楊枝を召使に焼かせると、その後、小人が現れることはなかった。“After that the little men never came back again.” とハーンは結ぶ。

「ちんちん小袴」の話はここで終わるのだが、ハーンは、もう一つ別のこんな話があるとして、こう続ける。怠け者の女の子がいて、梅の実を食べては、種を畳の間に押し込んでいた。長い間ばれずにいたが、ついに、妖精たちが怒った。夜ごと、振袖姿の小さな女たちが畳の間から現れては踊りまわり、女の子を責めさいなむのである。見張りに立った母親がその女たちを見つけて、打ち付けると、食べ残しの梅の種に変わった。その後、子供はとても良い子になった、という話である。

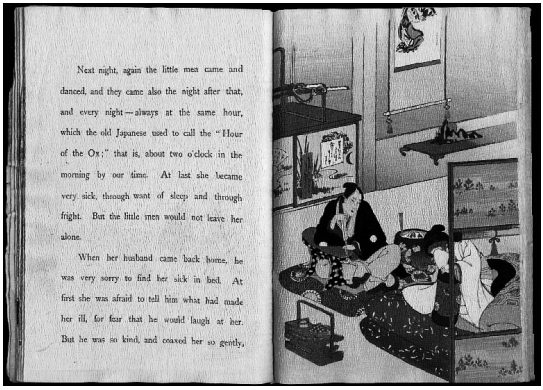
このように「ちんちん小袴」は、つづく梅の種の話同様、まずは物を大切に、畳をきれいに、という教訓をこめ、子供の物臭を戒める話として語られているといえる。〝畳に住まう妖精〟がいて子供を懲らしめるという冒頭の設定は、読者の英米の子供たちを念頭においたものだろうが、その妖精が怒るのは畳を汚され、空間の清潔が保たれない時である。ペリー提督をはじめ、エドワード・モース、ウィリアム・グリフィス、ネリー・ブライ

など、明治期の来日外国人の多くが、日本の住まいや街の清潔さに感嘆した記述を残していることはよく知られている。ハーンもまた、そうした大人の外国人読者（つまり絵本の購入者）の関心に答えるものとして、これらの民話を取り上げたとも考えられる。

ただ、ハーンは、主題はほぼ同じ爪楊枝の話と、梅の種の話の両方を知って、爪楊枝の方をメインにすえ、梅の種のほうを補足に下げてしまった。縮緬本シリーズでは、挿画が魅力になっている。「ちんちん小袴」でも、怠け者の娘と夫が登場する場面は浮世絵風に描かれ（図2）、丑の刻に小人の侍たちが現れるところでは、背景に牛の形が影絵のように配されている（図3）。梅の種のエピソードでは、御殿女中風の小さな女たちが描かれている（図4）。表紙でも、畳の間から出てくる梅柄の着物の女は爪楊枝の侍と同じ大きさである。

ならば、二つの話を同格にしても、絵本としては華やぎが増してよかったかもしれない。にもかかわらず、ハーンは、「ちんちん小袴」を主にした。それは、ひとつには、爪楊枝といった〝もの〟に命が宿って妖怪となって現れる、ということを興味深く面白く思ったからだろうと考えられる。いわゆる「付喪神（つくもがみ）」、器物の妖怪である。ハーンは、来日してすぐのエッセイのなかで、「日本では、木々にさえ魂がある。」と驚いている。キリスト教では人間にしか魂を認

2、



めないからだが、動植物などの生き物だけでなく、物や道具類にさえも命は宿りうるとする感性にハーンの関心があれば、当然、梅の実の種の妖怪よりも、無機的な物体である爪楊枝の妖怪の話の方に注目したはずなのである。だが、そのような民俗学的関心だけでこの話を取り上げたのでもないらしいことが、作品を読み込んでいくと仄見えてくる。

三、原話

「ちんちん小袴」については、森銑三とともに博覧強記の編集者・俳人として知られる柴田宵曲が「小さな妖精」（『妖異博物館』一九六三年）のなかで、次のように述べている。

「小泉八雲の書いた「ちん・ちん・こばかま」は小さな妖氣の漂ふお伽噺である。……（中略）……かういふ小さな妖精は、西洋のお伽噺にはよく出て來るから、西洋人には却つてわかりいゝかも知れぬが、日本にはあまり同類がない。「黒甜瑣語」[5]にあるのは、秋の夜のつれづれに獨り家に居ると、疊の間から筆の長さぐらゐの小人が三四人出て、そこらを駈け廻つて戰ふ。煙管でこれを打てば、皆消えてなくなつたが、暫くしてまた一人出て來た。今度は鎧冑に身を固め、大將軍の風がある。弓に矢をつがへて放つのを、また煙管で拂つたが、その時矢に射られたと思つたのは、恐らく自分の煙管で傷つけたのであらう。その時以來一眼になつた。——この小人は「黒甜瑣語」の著者も、どうやら幻想と解してゐるやうである。[6]」

柴田宵曲は、「ちんちん小袴」に漂う〝小さな妖気〟に魅かれる。子供向けの絵本として書かれたということ

も、教訓的要素も、あるいは日本古来の付喪神の要素もさして問わず、「小泉八雲が書いた」小さな妖精の話は、「日本にはあまり同類がない」と考えた。そして「黒甜瑣語」（明治二十九年）所収の似た不思議な体験談を連想した。

だが、長谷川武次郎からの依頼で出された「ちんちん小袴」はもちろん元は日本の昔話であり、佐渡、備中、出雲に伝わる話をもとにしていることがわかっている。(7)（日本海周辺地域を中心に伝わる話であるため、江戸っ子の柴田宵曲には、あるいは、なじみがなかったのかもしれない。）

その原話だが、『日本昔話名彙』（昭和二十三年）の中の「化物話」の項が、新潟県佐渡に伝わる「ちいちい小袴」（『佐渡島昔話集』132）の話を収録している。また類話として備中の「ちんちんちょぼし」（『民族』1-1161）、および大分県北海部郡の「化物話」（『昔研』1-182）の名を出典とともに付し、「ハーンの訳した「チンチン小袴」と備中のものと同じものなる事は間違ひない。」と記している。(8) 関敬吾著『日本昔話大成』（昭和二十五年）、『綜合日本民俗語彙』（昭和三十年）(9) でも、昔話の「ちいちい袴」についてほぼ同じ説明を載せている。

では、まず佐渡の「ちいちい小袴」を確認しよう。

昔ある山家に一人暮らしの婆があつた。ある晩の夜更け、いつものやうに一人で糸をつむいで居ると、どこからか一人の小男が来た。如何にも小さい四角張った男で、キチンと袴をはいてゐる。「お婆さん淋しいだらう。ワシが踊つて見ませう」とて、

チイチイばかまに木脇差を差して、

　　こればあさん、ネンネンや

と節面白く唄ひ乍ら踊つてどこかへ消えてしまつた。お婆さんは気味悪く思つて夜を明し、家中調べたら縁の下に只小さいかねつけ楊子の古いのが出てきた。早速焼棄てたらその夜からは、何の不思議も無かつた。昔からかねつけ楊子の古いのは皆揃へて焼捨てるものといふ。

——新潟県佐渡——（『日本昔話名彙』[10]）

そして「ハーンの訳した「チンチン小袴」と備中のものと同じものなる事は間違ひない」（『日本昔話名彙』）という備中の「ちんちんちょぼし」は次のように語られている。

　昔或家の女房が夫の留守に、夜分ただ一人で縫いものをしてゐると、たけ一寸ばかりの小人が何十人といふ程、行列を作って部屋の中を練りあるいた。お大名の行列のやうに槍を立て、中には駕籠に乗つてゐる者もあつた。

　　ちんちんちよぼし、夜も更け候へば、御殿坊のおん帰り、ほいほい

と謂つてあるいた。怖ろしくて一晩中睡ることが出来なかつた。翌日主人が還って此の話を聴き、今夜も来るか試して見ようと、外へ出たふりをして隠れて見てゐると、やはり同じ様に、

　　ちんちんちよぼし、夜も更け候へば、御殿坊のおん帰り、ほいほい

と謂ひながら、部屋の中をねつてあるくので、いきなり物陰から飛出して刀を抜いて其行列を切拂うと、忽

ち姿を消してしまつた。不思議に思つて畳をあげて見ると、短かく折つた箸が幾らともなく散らばつて居た。

是は若い女房が箸を粗末にして折つて捨てるので、其精が斯うして現はれたのだといふことであつた。

此の話は私の郷里備中で聴いたものだが、出雲にも同じ話が行はれて居るといふことである。

（「昔話二つ　原田譲二」（雑誌『民族』、大正十五年九月号）[11]）

ここで、この二つの話を改めてハーンの作品と比べてみれば、共通する要素として、双方とも夜中に小人が出てきて歌い踊り、佐渡の場合は御婆さんを、備中と出雲の場合は妻をからかう。その歌の歌詞も似ている。朝になって調べると、佐渡の場合は縁の下にかねつけ楊枝が、備中と出雲の場合は畳の下に箸が打ち捨てられていたことが分かり、きちんと片づけたら、もうその妖怪は出てこなくなった、というのも一緒である。

「ちんちんちょぼし」の方がハーンの原話とされたのは、出雲にも伝わる話だということに加え、怠け者の妻という設定、夫の登場、夫が刀で切りつけるといった細部が同じだからと思われる。だが、出てくるのが楊枝の妖怪で、小人が裃姿に刀をさしているという特徴、そして題名の〝袴〟に注目すれば、ハーン作品はむしろ、佐渡の話に近い。特に示唆的なのが縮緬本の最後に添えられた小さな雀のカット（図5）である。

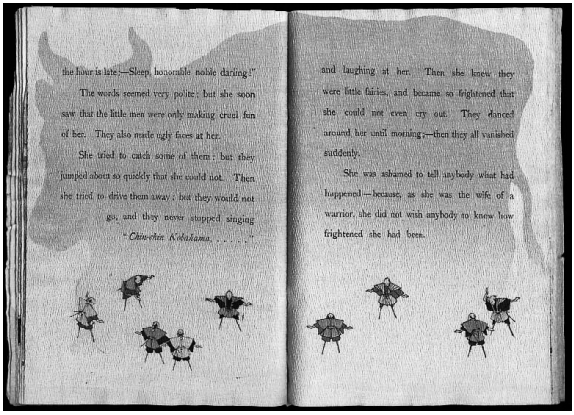
題の「ちんちん小袴」「ちいちい袴」については、柳田国男が「野草雑記」（一九四〇年）のなかの「雀の袴」という項目で、こう述べている。佐渡の方言では、道端に黄色の小花を咲かせる雑草のカタバミのことを「雀の袴」という。それは葉の形が折り畳んだ小さな袴に似ているからだ。またこの地方の子供言葉で雀のことを「ち

いちい」、そこからカタバミを「チンチン草」といい、備前や石見でもそう言う。そして、柳田は、昔話の「ちんちん小袴」という言葉もこのような連想をさそう、と付け加えている。(12)

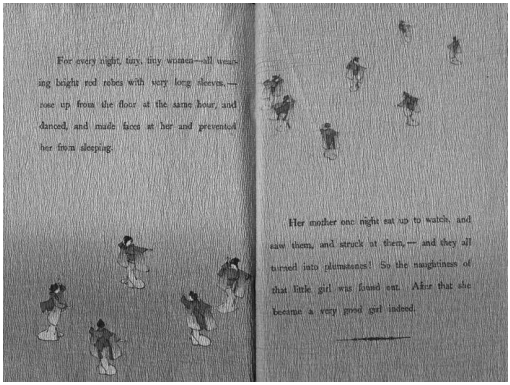
「ちいちい袴」すなわち「雀の袴」、つまり小さなカタバミの葉のことだと知ると、(13) 佐渡の話のなかで、小人の姿を、「如何にも小さい四角ばつた男で、きちんと袴をはいてゐる」と描いているのが急に納得できる。また、ハーンの「ちんちん小袴」の末尾の一見何気ない雀と楊枝の挿絵（図5）も、絵師が言葉の意味を知っていて添えた絵だとわかって、面白い。裏表紙には、小人たちが消えゆく場面が墨色のぼかしで幻想的に描かれているが（図6）、その後ろ姿が小さな六角形を散らしたようで、いかにもカタバミの小葉らしく見えてくる。長谷川がハーンと絵師に提示したのは、まずは佐渡の話であり、そこに備中の話の要素が付加されたと考えていいだろう。

ただ、佐渡・備中の話とハーンの作品には、違いがある。原話では、御婆さんなり、夫なりが後で調べてみたら、捨てられた鉄漿付け楊枝や箸があって、妖怪の正体がわかる。それに対してハーンの作品では、夫が刀で斬りつけると、その瞬間、小人たちが消えて、無数の爪楊枝が畳の上に散らばっているのである。しかもハーンの爪楊枝は、原話の箸や鉄漿付け楊枝より、ずっと細く小さい。

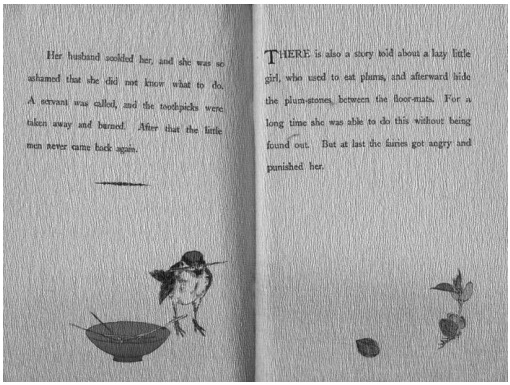
3、


the hour is late—Sleep, honorable noble darling!"
The words seemed very polite; but she soon saw that the little men were only making cruel fun of her. They also made ugly faces at her.
She tried to catch some of them: but they jumped about so quickly that she could not. Then she tried to drive them away; but they would not go, and they never stopped singing
"*Chin-chin Kobakama*. . . . ."
and laughing at her. Then she knew they were little fairies, and became so frightened that she could not even cry out. They danced around her until morning—then they all vanished suddenly.
She was ashamed to tell anybody what had happened—because, as she was the wife of a warrior, she did not wish anybody to know how frightened she had been.

4、



5、



6、

“There were no more little warriors — only a lot of old toothpicks scattered over the mats.” とハーンは記す。刀を振り下ろすと、小人たちが、はらはらと爪楊枝と化す。小人たちのそれまでの賑やかな囃子歌が消えて、深夜、丑の刻の静けさが支配するなか、夫は無言のまま、畳の上に散らばった細い針のような爪楊枝をじっと見つめる。印象的な場面であり、物語のクライマックスといっていいだろう。ハーンは、原話にない、この部分を挿入した。つまりハーンにとって何か心の奥から湧き上がってくるものがあったということだろう。

そして実はハーン晩年の「ひまわり」という文章に、似た情景が描かれているのである。「ちんちん小袴」の妖怪がなぜ爪楊枝でなければならず、箸や梅の種ではだめかという理由もそこにある。

四、ハーン「ひまわり」

「ひまわり」(“Hi-mawari”) は、アイルランドですごした子供の頃の思い出をつづった短い随想で、『怪談』(*Kwaidan — Stories and Studies of Strange Things*, 1904) の最後の方に収められている。不思議な竪琴弾きの歌うアイルランド民謡が挿入されていることでも知られ、時期的には、ちょうど「ちんちん小袴」を書いたころと重なる。追憶はこう始まる。

On the wooded hills behind the house Robert and I are looking for fairy-rings.

(「家の裏の、森になった岡の上で、ロバートとぼくは妖精の輪を探している。」)

アイルランドなどケルトの伝説では、妖精は地面の下に棲んでいて、夜、地上に現れ、月の光のなか、輪になって踊るとされている。その踊りの輪の中にうっかり引き込まれると、この世に戻ってこられなくなるのだが、妖精たちが踊った跡は草地に丸く残る。それが〝妖精の輪〟である。

森のなかで、妖精の輪を探す二人の子供の姿を映し出したハーンは続けて述べる。

「ロバートは八つで、愛らしくて、とても利口だ。ぼくは七つになったばかりで、…それでロバートをすごく尊敬している。それはお日様がかくやくと輝く八月の日で、暑い大気は、刺すように鋭い、甘酸っぱい松脂の匂

いで満ちていた。」

“We do not find any fairy-rings; but we find a great many pine-cones in the high grass ……”

妖精の輪はみつからないが、かわりに、松ぼっくりが沢山落ちている。

そして、「ぼく」は、フェアリー・リング、妖精の輪のなかで不覚にも眠ってしまった男が行方知らずとなったというケルトの昔話を思い出し、ロバートに話す。すると、

“They eat nothing but the points of needles, you know,” says Robert.

“Who?” I ask.

“Goblins,” Robert answers.

ロバートが、「あいつらは尖った針の先しか食べないのだよ」と言う。「誰が」とぼくは聞く。「ゴブリンたちさ」とロバートが答える。

二人のまわりには、松ぼっくりがたくさん落ちていて、当然、地面には枯れた松葉も無数に落ちている。その細く尖った茶色の松葉が、針を連想させ、針の先を食べるという“Goblins,”、妖精や妖怪の存在が急に身近になるのである。そのとき、ジプシー風の竪琴弾きがやってきて、不思議な歌を歌う。作品の中では、この歌と、やがて早死することになるロバートをめぐるハーンの追憶が続く。

静かな幻想性が漂うこの冒頭の場面では、幼い日のハーンが、地面一面に散らばる針のような松葉をみつめ、地面の下に潜む妖精、妖怪の存在を、いわば異世界の存在を感じている。目に見えぬ妖精の踊りの輪がまざまざ

と現出する。ふと怖くなって、身震いしたかもしれない。

そして、ハーンの心の内にしまわれていた、そんな幼き日の映像と、「ちんちん小袴」のクライマックスの場面、すなわち、畳一面の爪楊枝を見つめて、畳の下にひそむ存在を悟る夫の姿は重なりあうように思う。地下世界から地上に現れる妖精とも妖怪ともつかぬ怪しげなものたち。一見楽し気に歌を歌い踊っている。だがそこに引き込まれたら、戻っては来られない。底知れぬ不気味さを漂わせつつ、不思議なその歌が耳について離れない。

柴田宵曲が敏感に感じ取った「小さな妖氣」とは、まさに、この場面の背後にひそむ、ケルトの気配が発するものに違いない。いわば、ハーンの再話によって、日本の付喪神、器物の妖怪の昔話に、ケルトのゴブリンの怖さがそっと塗りこめられた。そして読者が夫とともに畳に散らばる細く鋭い楊枝を見つめるとき、その脳裏には冒頭のナイフの映像が急なリアリティをもって蘇るのではないか。

五、狂言「ちんちん小袴」

では、このケルトの妖気が漂う小さな昔話は、いかなる狂言作品と化したのか。

茂山千五郎家は「千作千五郎の会　第三回公演　イェイツと八雲に愛された狂言」（二〇一七年、二〇一八年再演）で三つの作品を上演した。ウィリアム・バトラー・イェイツ原作「猫と月」、ハーンの「ちんちん小袴」そして古典の「石神」である。十九世紀末、アイルランド出身の二人の外国人の原作による新作の狂言をふたつ、

その後に馴染みのある日本の演目を置いたことになる。

W・B・イェイツは、ケルトの神話伝説や民話に関心を持って、ハーンが日本の怪談など古い物語を集めて作品集にしたように、アイルランドの伝説集を編んだ詩人である。そして来日の経験はないが、戯曲「鷹の井戸」(At the Hawk's Well, 1916) をはじめ、その劇作が日本の能楽に深い感銘を受けたものであることは良く知られている。「猫と月」(The Cat and the Moon, 1917) についても、狂言「不聞座頭」がその出典として指摘されている。従って、日本アイルランド外交関係樹立六十周年を記念してイェイツ作「猫と月」の狂言が上演されたことはごく自然な企画だったといえる。

一方、ハーン作品を狂言に仕立てることは、意外に大胆な試みだったというべきだろう。日本の文化に深く傾倒したハーンだが、能楽、特に狂言に直接関心を示したことはなく、著作での言及も、翻案も、観劇の記録もない。妻の節子は芝居好きで、狂言の題材をあしらった封筒が遺品のなかにあるため、妻から話を聴いていたかもしれないという程度である。ただ能に関しては、日本の能を翻訳紹介したB・H・チェンバレン『日本の古典詩歌』を読んでおり、また、ハーンの怪談に夢幻能に通じる要素があることが指摘されている。とはいえ、ハーンの作品のなかで狂言にできそうなコミカルなものとなると、おのずから限られてくるだろう。それゆえハーン作品の狂言化は興味をさそう。

狂言「ちんちん小袴」の制作に関して次のような興味深い新聞記事の一節がある。「……（略）……茂山千五郎さんに、この新作狂言の意図などを伺いました。「狂言自体、喜劇なので楽しんで笑ってもらうところがほしく、ちょこちょこっと（面白い夫婦のやり取りなどを）入れてみた。楽しい作品にはできたかなと思います」と千

五郎さん。また「こびとを（舞台に）出すか出さないかは、まず悩んだところ。へたに出してしまうと（こびとの）イメージがついてしまう。出さないとなると、夫と嫁さんをクローズアップしないといけない」と創作過程も少し明かしてくださいました。……（略）……」（毎日新聞二〇一七年十二月四日地方版、「支局長からの手紙　八雲と狂言／島根」）

茂山千五郎による台本が刊行されているわけではないので、以下はあくまでも観劇の記憶からの記述ということになるが、狂言では、妻と、侍である夫との掛け合いが面白おかしく演じられていた。ハーンの原作では可愛い幼な妻だったのが、狂言では、（当然ながら）大人の太目の妻となる。旅から帰った夫がその妻を見て、「お前は体を動かさないで、食べてばかりいるから、一回りも二回りも大きくなった」と言い、妻は妻で、夫に旅先での功績の話などどうでも良いから、早く小人の退治を、と急かす。小人は夫婦の話のなかに言及されるだけで姿を現すことはない。夫婦のコミカルなやりとりに笑いが起こるなか、最後に、叱られた妻が「参りました」と謝りつつ、退出する。

つまり、ハーン作品のクライマックスの場面はカットされ、不思議な小人の姿もあいまいになり、そのことによって、原作に漂う異世界の妖気、怪奇性が消えた。元々の民話にある付喪神や教訓的要素も希薄になり、かわって前面にでてくるのが、妙に近代的な夫婦の対話の喜劇である。

夫婦の対等の立場での攻防という側面は、三つ目の演目「石神」が「ちんちん小袴」に続いたことで、より際立ったように思える。「石神」では、今度は夫の方が酒飲みでだらしなく、離縁を考えている妻を何とか思いとどまらせようと策を弄するのだけど、それもばれてしまい、最後は「参りました、参りました」、と退出する。

当日の国立能楽堂のお客さんは、やはり女性が多かった。「ちんちん小袴」で、妻が夫に叱られたあと、最後は「石神」で夫が、いわゆる〝わわしい女〟の妻にやりこめられて、客席からの笑いに包まれて終わったような気がする。

ハーンの作品に登場する夫婦ものは、悲劇か復讐劇が多いなかで、狂言「ちんちん小袴」は、珍しくコミカルな夫婦の物語に作り替えられた。茂山千五郎の手による大胆かつ新鮮な変貌ぶりといっていい。だがその大胆な判断は、千五郎個人というより、あるいは、狂言という形の力、伝統の要請によるものなのかもしれない。イェイツ作品のように元々狂言に触発されたものより、そうではないハーンの作品の方が、狂言化の結果は興味深い。ハーンの“Chin-chin Kobakama ―― The Fairies of the Floor-Boards”と、狂言「ちんちん小袴」を比べてみれば、ハーンの原作の持ち味は一層明らかになり、また狂言の本質も見えてくる。ひとつの素朴な物語が、土地の昔話、ハーンの再話作品、そして現代の新たな狂言作品へと、東西を往還しつつ展開していく、ひとつの興味深い事例といえる。

※本論は、二〇一八年三月二十二日（木）、成城大学民俗学研究所において開催された、民俗学研究所主催のワークショップ『能・狂言をめぐる東西の往還』での発表「ラフカディオ・ハーン作“Chin-chin Kobakama ―― The Fairies of the Floor-Boards”と新作狂言「ちんちん小袴」」をもとにしたものである。

（1） *The Writings of Lafcadio Hearn, 16 vols*, edited by Elizabeth Bisland Westmore, Boston, Houghton Mifflin Company. 1922

（2） 石澤小枝子『ちりめん本のすべて　明治の欧文挿絵本』三弥井書店、平成16年、に詳しい

（3） さらにはドイツ語、フランス語、スペイン語、スエーデン語などの版も出され、長谷川弘文社が各国の書店と代理店契約を結んでいたことが奥付からわかる。

（4） 『日本昔話シリーズ』の全タイトルは次の通りである。

1. 「桃太郎」 Momotaro
2. 「舌切り雀」 The Tongue Cut Sparrow
3. 「猿蟹合戦」 Battle Of The Monkey And The Crab
4. 「花咲爺」 The Old Man Who Made The Dead Trees Blossom
5. 「かちかち山」 Kachi-Kachi Mountain
6. 「ねずみの嫁入り」 The Mouse’s Wedding
7. 「瘤取」 The Old Man And The Devils
8. 「浦島」 Urashima
9. 「八頭ノ大蛇」 The Serpent With Eight Heads
10. 「松山鏡」 The Matsuyama　Mirror
11. 「因幡の白兎」 The Hare Of Inaba
12. 「野干ノ手柄」（きつねの手柄） The Cub’s Triumph
13. 「海月（くらげ）」 The Silly Jelly-Fish
14. 「玉の井」 The Princes Fire-Flash And Fire-Fade

15. 「俵藤太」 My Load Bag-O'-Rice
16. 「文福茶釜」 The Wonderful Tea Kettle
17. 「竹箆（しっぺい）太郎」 Schippeitaro
18. 「羅生門」 The Ogre's Arm
19. 「大江山」 The Ogres of Oyeyama
20. 「養老の滝」 The Enchanted Waterfall

（5）引用者注：『黒甜瑣語』「第一編巻之四」「棚谷家の怪事」、人見寧 著、明治二十九年

（6）『妖異博物館』、筑摩文庫版、一九六三年、247 頁

（7）なお、梅の実の話についても、飛騨に似た民話「火なたに捨てられた木の実の種は化ける」がある。（江馬三枝子『日本の民話15』未来社、一九五八年、同『日本の民話 9 美濃・飛騨篇』、一九七八年）

昔、ある山に炭焼きの夫婦がおりました。この夫婦には一人の幼い娘がおり、名を「花（はな）」と言いました。

冬も近づいた秋の頃、花が炊事の用意をしていた時のことです。狐がリスを狙っているところを目撃し、おもわず柄杓（ひしゃく）で狐を殴り殺してしまいました。花は自分のしたことが怖くなって、狐の血のついた柄杓を囲炉裏に投げ込んで燃やしてしまいました。

しばらくして、両親が沢山の木の実を持って帰ってきました。花が食べた実の種を囲炉裏に吹き出すと、それを見た両親が「火なたに木の実を捨ててはいかん。木の実が化けて出ると言うたじゃろ」と咎めました。

次の日、両親は里に出かけたので、花ひとりが留守番をしていました。雨の降る中、花は少し心細くなりながら待っていましたが、夜になっても両親は帰ってこず、花は炉端でうとうとと居眠りをし始めました。

すると、囲炉裏の中から身の丈三寸ほどの木の実を被った小人が現れ、お囃子のように楽器を鳴らし出しました。最初こそ可愛いと思った花でしたが、囲炉裏からどんどん出てくる小人たちが次第に怖くなってきました。花は、小人達を囲炉裏の中に押し戻し、灰の中に埋めてしまいました。すると、こんどは灰の中から手がでてきて、花の足を掴みました。花は悲鳴をあげて、そのまま気を失ってしまいました。

翌日、両親が囲炉裏の灰を探ると、柄杓と木の実の種が沢山見つかりました。やはり柄杓と木の実が化けたのでしょう。山からもらった木の実は、土にかえすのが一番いい。そうすれば、またいつの日か沢山の木の実をつけるのだから。

（8）『日本昔話名彙』日本放送出版協会、昭和二十三3年、190 – 191 頁。

（9）『綜合日本民俗語彙』第二巻、民俗学研究所編　昭和三十年、平凡社、914 頁

（10）『日本昔話名彙』、同前。

（11）『民族』(1-1161) 第一巻第六号、一七九―一八〇頁、大正十五年九月

（12）『定本柳田国男集　22』、六九頁

（13）『佐渡植物方言語源私考』（本間健一郎・渡辺洋子著〈新潟県植物分布調査記録／石沢進編、6〉、新津植物資料室、二〇〇三年）でも、カタバミの呼び名として「すずめぐさ（雀草）、すずめのあいきょう（雀の愛嬌）、すずめのちょうちん（雀の提灯）、すずめのはかま（雀の袴）」を記載している。

（14）*The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 11, ed. Elizabeth Bisland, Boston: Houghton Mifflin,1922 ,p.259
平川祐弘訳「ひまわり」平川祐弘編訳・小泉八雲名作選集『明治日本の面影』講談社学術文庫、一九九〇年、四五六頁